様式第２号

視察研修先	千葉県君津市	氏名	太田陽子
視察研修項目	君津市商工・観光アクションプランについて		

感想・所見など

君津市は、君津地域、小糸地域・清和地域、小櫃地域・上総地域の３エリアで構成されている。

君津地域は東京湾に面したエリアで、現在は日本製鉄所が操業している。京葉コンビナートの一部で、人口８万人のうち６万人が住んでいるということだった。西部には、小糸川流域に形成された市街地があり、住宅街が続く。

小糸地域・清和地域は、北部の小糸地域は、木更津市と接し、「かずさアカデミアパーク」を立地している。産業用地や研究用地として活用している。小櫃地域・上総地域は、北部の小櫃地域は、広大な田畑を有し、農業が盛んな地域になっている。南部の上総地域は、久留里の名水があり５つの酒蔵がある。酒蔵の量は、関東で一番とのことだった。

千葉県の製造品出荷額は１２．５兆円（全国８位)、君津市は７，０００億円（県内４位）となっていて、鉄鋼業が製造品出荷額の９割以上を占めている。

君津市の位置が、南房総市などへの通過点になっていて、宿泊客や観光客の誘致に苦戦しているということだった。

地場産業の振興や観光、農業など、総合的に発展していくための施策で、官民挙げての支援策など、計画に盛り込まれていた。

首都圏に近く、近隣に木更津や南房総という資源があっても、人口の流出や観光の衰退などの課題があり、取り組んでいるということだった。

関東圏では珍しい日本酒の酒蔵もあり、新酒まつりなど行っているということだった。

地場産業や環境資源の磨き直しなど、課題を明確にして解決していくため、官民挙げての取り組みなど参考になった。

養老渓谷など行ったことはないが、テレビの映像などで見たことがあり、君津市にあることを認識した。

個人旅行が多くなっている今、観光資源の掘り起こしや連携など、今後寒河江市でも、本腰を入れて取り組んでいかなければならない問題であると思った。

農業を含む地場産業の振興なども重要で、総合的な振興につながるような施策が必要と思った。

様式第２号

視察研修先	千葉県南房総市	氏名	太田陽子
視察研修項目	道の駅を拠点とした観光振興について		

感想・所見など

南房総市は、房総半島の南端部に位置し、温暖な気候でビワの生産で有名だった。７町村が合併し、内房から外房まで位置していた。道の駅は、８つあり、第三セクターで運営していた。町村合併前のそれぞれの特徴を生かし、合併後も基本的に地域の道の駅の特色を引き継いでいた。

株式会社ちば南房総は、１００％市が出資し、社長は市長が務めている。日頃から連携を密にし、市が担うべき部分と指定管理者が担う部分を明確にしているということだった。

指定管理者も観光協会に所属し、観光協会や行政と一体となって観光振興を図っているということだった。

道の駅には、直売所が併設しており、小規模農家の方も販売できることや規格外品を買い取り、加工品などに活用していて、生産者の所得向上や食品ロスにも寄与していた。

株式会社ちば南房総では、団体客集客の仕組みとして、「一括受発注システム」を構築してきた。周辺に強力なコンテンツを持たないため、近隣市町を含めた小さな観光資源（体験メニューや食事、景観など）を束ねてパッケージ化して、一括で旅行会社に販売、または旅行会社のリクエストを受け、細かな手配を行うなど、観光日帰りバス（団体客）の誘致を行ってきた。民宿の食事を同一化したり、精算を一括にしたり、利用しやすいようにしてきた。

市内８ヶ所のほか、近隣市町の道の駅等と連携したスタンプラリーなどを開催して、域内の周遊を促していた。１～２月は花畑、ビワの季節はビワ狩りなどを実施している。

道の駅に POS レジシステムを導入し、レジシステムの統一を図り、売り上げの分析や在庫管理が容易になったことにより、具体的なデータとして管理できるため、売れ筋商品の把握・品切れの防止や、過剰在庫に役立てていた。しかし、システムを使いきれていない面もあるということだった。

道の駅は防災拠点、防災道の駅に指定されていたり、コミュニティ活動の拠点としてのギャラリーや多目的室、会議室など、レンタルスペースも設置していた。地域の方が書道展や絵画展など開催しているということだった。

市が建設した総合加工施設を最大限活用し、加工食品の開発、販売や卸として稼げる体制づくりが必要とのことだった。

大規模改修において、お客のニーズや、滞在時間の延伸を期待して飲食スペースの充実を図っていた。エレベーターや授乳室の設置を行っていた。

食堂は、昼食メニューは少なく、ビワを前面に押し出したカレーなどが中心だった。ビワのパフェなど、私にとっては珍しいものだったが首都圏からの誘客など大変だと思った。

道の駅などの視察は、JR の利用では困難で、視察先の方の送迎をしていただき、ありがたかった。車の利用など考えても良いと思った。

様式第２号

視察研修先	千葉県鋸南町	氏名	太田陽子
視察研修項目	都市交流施設・道の駅 保田小学校について		

感想・所見など

鋸南町は、人口は６，５００人。少子高齢化が進み高齢化率は５０％になっている。子どもの数が減少し、小中学校が１校になり、廃校の利活用を考え、人を集めること、都市との交流を考え、道の駅を考えてきた。

廃校を利用した「道の駅」で、宿泊施設を併設していた。PPP で民間が受託している。高速のインターチェンジの近くにあり、鋸山などがあり、車で都内から気軽に来れる観光地になっている。

廃校となる４～５年前から考えて企画してきた。閉校して１年ほどで立ち上げた。放置する年月により、建物の劣化がひどく、お金がかかるので、早い段階から考えていくことが大事。全国２，０００施設がそのままになっている。廃校をビジネスにできると推奨してきた。

住民の前で考え、決定してきた。全国から応募を募った。６社が残り、学生のチームが残った。建築学の学生で、産官学連携になった。

整備費用として１２億円かかった。過疎対策事業費を活用した。イノベーションはお金がかかり、煩雑な工程があったが差別化を図った。学校という資源を活用した。

２階は、教室を半分にして、１０部屋の宿泊施設になっている。町の縁側（ベランダ側）から中を見てきたが、教室そのままにベッドがある状況だった。町の縁側は、避難場所になっている。防災施設も併用しなければならないということだった。

差別化は必要、ストロングポイントを作ることが重要。特産品を前面に出すようにすることが重要である。鋸南町は特産品がなく、学校のストーリーを道の駅の特徴にしてきた。毎日ラジオ体操、開店９時には校歌斉唱をして、懐かしい給食のメニューを提供している。

体育館は鋸南町の物産など扱うマルシェになっていた。

緑のおじさん（横断歩道の誘導員）など、学校に関連したものをコンセプトに考え、お土産品など作ってきた。

閉園した幼稚園を活用し、駐車場の拡大、芝生の公園、雨天も遊べる場、ＲＶパークなども併設してきた。過疎対策事業費を使った。

新聞やマスコミ、テレビの取材は多く、今も続いている。道の駅ランキングで２位になっている。経済効果があり、９８億円を生んでいる。バラエティ番組や全国放送などは大変だが、全部受けている。放送後の週末など、渋滞するほどの人になる。

年間１００万人の来場者を誇り、運営に４００人ほどの人が関わっている。指定管理料は最初の年度は４，０５０万をもらっていたが５年目からはもらっていない。町に還元している。

夏休みの最中であったためか、子ども連れや高齢者の方も多く、マルシェなどレジに並んでいる状況だった。立地条件も良く、集客もあり、収益につながっているようだった。

様式第２号

視察研修先	千葉県市原市	氏名	太田陽子
視察研修項目	リノベーションまちづくりについて		

感想・所見など

市原市は、千葉県の中央位置し、南北に長く、北は内房に面し、京葉コンビナートの工業地帯で、中南部は田園・里山地帯が広がり、ゴルフ場が２０数か所あるということだった。養老渓谷は、チバニアンの地層がある地域で、ビジターセンターもあるということだった。７７万年前の地層など興味深かった。工業製品の出荷額は、全国３位でプラスチックの原料などを作ってる。

人口の減少は市原市でも問題で、２００３年には２８万人だったが、毎年１，０００人の減少で、現在は２６万人まで減少しているということだった。工業地帯を抱えているため、１８歳からの男性の人口は増加しているが、２０代、３０代の女性の市外への流出が多く、女性の就業率が大きく下回っており、女性にとって魅力がないまちになっている。

起業の支援などの課題も含め、リノベーションまちづくりは、６年前より実施している。ＪＲの駅が３箇所あり、その周辺の未利用地の利用などまちづくりに取り組んできた。

五井駅の西口は、駅前は空き地、駐車場などが多く、利活用を考えてきた。若い人（女性）等、魅力があり理想的な暮らしを作ることや不動産・人・歴史を資源として捉え、新しいものを作るのでなく、今あるものを有効に活用していくというコンセプトで取り組んでいた。

市原市、商工会議所などで実行委員会を作り委託、補助金を出し勉強会を実施した。官民挙げて推進している状況が分かった。実行委員会には、まちづくりをしたい人（プレイヤー）の発掘や相談の場を委託した。

市、実行委員会からだけでなく、プレイヤーが自走できるような「市原会議」などプレイヤーをつなぐ場を設定している。

リノベーションまちづくり塾は、受講料が１万円で定員は１０人とのことだった。延べ６０人ほどの受講者がおり、３０代４０代が多いということだった。

実際、駅前の空き店舗の利活用など、事業プランを立て、物件の確認、大家さんや市長などへのプレゼンを行い、事業化していくということだった。

五井駅の西口は工業地帯の入り口で、夜の街になり、朝や日中はシャッターが閉まっている状況のアーケード街があり、月一回の朝市（ちょっとした朝食）などを開催した。その後、公園を利用したマルシェなどに広がっている。空き店舗を利用したシェアキッチンでのテストマーケットなど、その後の出店などにつながっている。

姉崎駅、八幡宿駅等、その土地の特徴を加味し、まちづくりが広がっているということだった。ビルのオーナーの参加などあり、広がりを見せている。

行政としては、プロモーション（市報の特集記事、ホームページへの掲載（市の後援））など行っている。市原会議でのプレイヤーの発信の機会など、後押しや伴奏支援を行っているということだった。実際の状況など確認してみたいと思った。

若者が夢を語り、意欲を持って取り組めるものを探求できる機会になっていると思った。